1.「ラオス国児童に対する歯磨き指導による口腔衛生改善事業」に参加して

沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センター
―沖縄歯科口腔外科学研究振興―
松島　一夫

ラオスって何処にあるかご存知ですか？しかし、一昨年の平和賞受賞を機にラオスが身近な存在になっていたのは私だけではないでしょう。

今回のプロジェクトは、JICA の草の根技術協力事業で、小学校３校（今年度は１校、次年度２校プラス）の歯科検診（年２回）を実施し、有う蝕児童はセタティラート病院内（振興会が口唇口蓋裂手術を行なっている拠点病院）の歯科診療所で治療を行ない、その後ブラッシングとフッ素洗口で口腔衛生の改善を行なう事によって予防歯科の重要性を啓発していくことを目的としています。

ちなみに JICA の草の根技術協力事業とは、NGO,大学、地方自治体の団体等がこれまで培ってきた経験や技術を活かして企画した、発展途上国への協力活動を JICA が支援し、共同で実施する事業とあります。

当センターは第３回沖縄平和賞を受賞するなど、ラオスでの実績が認められ今回の事業が採択されたものと思われます。

実施期間は２００８年６月～２０１１年３月で、事業費は９，９９１千円です。

第１回の参加者は、砂川元振興会顧問、喜屋武満同会会長、仲宗根敏幸、又吉亮同会会員、ラオスから琉大で研修中のセタティラート病院歯科部長トンサバン・ファナフォン先生そして私の６名でした。

６月２２日（日）AM７：１５沖縄発、福岡、バンコクを経由して PM２１：１０（現地時間）ビエンチャン到着。（２時間の時差あり）蒸し暑く何か懐かしい感じがしました。

夜遅くの到着にもかかわらず、空港には通訳をはじめ、セタティラート病院の関係者が花をもってお迎えしてくださいました。振興会のラオスでの功績がうかがえます。

迎えの車２台に分乗してホテルへ向かいました。右側通行ではありますが車窓からの風景はやはり懐かしい感じがしました。ホテルに到着。到着前はどんなホテルか不安もありましたが、バス、トイレ完備で部屋もかなり広くホッとしました。これから１週間ここに滞在です。

２３日（月）。今日の予定は、今回プロジェクトの説明のため官房長官、保健省大臣、教育省大臣、ラオス JICA 事務所、セタティラート病院病院長への表敬訪問です。今回のプロジェクトは決して大規模なものではありませんがラオス側の期待もうかがうことができました。また、関係省庁の大臣が直接面談をいただいたことは、たいへん名誉に思うと同時に、振興会のラオスでの功績が認

知されていることをあらためて確認することができました。

表敬の合間には砂川先生の取り計らいで国立医科大学の歯学部、歯科の開業医の見学を行ないました。今までに見たこともないかなりの年代物のユニットが使われているのは驚きでした。

２４日（火）。翌日の歯科検診を前に今回のプロジェクトの内容を学校の職員、児童、家族へ説明をおこない、口腔衛生の重要性についてスライドを使って砂川先生と私で講演をしました。

学校へ到着すると車の周囲に「上を向いて歩こう」を歌いながら全児童が押し寄せてきて、草花で作った手作りのレイをもって迎えていただきとても感激しました。また、テレビや新聞の取材もあり翌日の「ビエンチャンタイムス」には今回プロジェクトの内容が写真入りで紹介されました。

その日の午後には歯科検診時の物品（スーツケース４個を持参）の確認をおこない翌日に備えました。

２５日（水）。今回のプロジェクトの実施校はビエンチャン市内にあるドンコイ小学校（２２７人）です。検診表は日本の学校検診で使用しているものを英語表記にしたものを用意しました。校長先生に児童の名簿の提出をお願いしたところ、名簿自体が存在しないとの事でした。小学校は５年制で同学年でも入学時期によって２，３歳の年齢の違いがあるようで、教育体制が確立されていないことが窺えました。

検診は受付けで検診表に名前と生年月日の記入後、各自で検診表を持って検診をおこないました。

検診後は染色液を使ってのブラッシング指導をおこない、その後フッ素洗口を実際に実施しました。染色液を使ってのブラッシングは先生方も体験してもらい好評でした。フッ素洗口はミラノールを使用し、週１回セタティラート病院の歯科医師がフッ素洗口の実施状況を確認しながら学校へミラノールを届けてもらうこととしました。

う蝕罹患者率は９０％以上あり、カリエスフリーの児童は１１名で、賞状と記念品（文房具）を添えて表彰をおこないました。

２６日（木）。次年度から対象校となる、ポンパパオ小学校、ノンハイ小学校の校長先生を訪ね、ドンコイ小学校での今回プロジェクトの実際をスライドで見てもらい、実施同意書にサインをいただきました。両校長とも今回のプロジェクトに対し理解を示し、全面的に協力することの承諾を得ることができました。

２７日（金）。セタティラート病院内で外来患者や病院スタッフ対象に口腔衛

生の重要性や歯周病についての教育ポスターの展示をおこない、歯ブラシと歯磨剤の無料配布をしました。

当初の予定では、２８日（土）帰国でしたが航空券が取れずに２９日（日）に帰国しました。あっという間で充実した１週間でした。

今後この事業を成功させるためにはいくつかの課題はありますが、ラオスの子供たちの口腔衛生状態を改善するための第一歩になると思います。

最後に、私にとって今回のプロジェクトに参加できたことは、忘れることのできない経験となりました。昨年、当会の総会で琉球大学岩政輝男学長の特別講演「国際交流の楽しみ」を聴講して以来、機会があれば自分もいつかは国際貢献を通じて国際交流をしてみたいという気持ちがありました。その１年後に今回の事業に参加できたことはとても幸運だったと思います。

ありがとうございました。

2.「ラオス国児童に対する歯磨き指導による口腔衛生改善事業」に参加して

平良恵信

このプロジェクトは昨年 6 月に始まり、今回が第 3 回目となります。ビエンチャン市内の小学校３校（ドンコイ小学校、ポンパパオ小学校、ノンハイ小学校）の歯科検診（年２回）を実施し、有う蝕児童はセタティラート病院内の歯科診療所で治療を行う。その後、ブラッシングとフッ素洗口で口腔衛生の改善を行う事によって予防歯科の重要性を啓発していくことを目的としています

今回の参加者は、琉大から仲宗根敏幸先生、嵩元裕之先生、開業医から辺土名朝憲先生、神谷茂先生と私の５名でした。ラオスからは、セタティラート病院歯科部長のソンフォン先生と若手の歯科医師数名、その他病院スタッフを含め１０名あまりが参加して行われました。

5 月３日（日）AM 7：15 沖縄から福岡に出発。新型インフルエンザの流行で混雑が心配されましたが、以外とスムーズに出国手続きが終わり、バンコクを経由して PM21：10 ビエンチャン到着（２時間の時差あり）。５時間のフライトとバンコクでの待ち時間の長さでいささか疲れ気味でした。空港ではセタティラート病院のソンフォン先生、通訳のクアントーンさんが迎えてくださいました。迎えのワゴン車でホテルに向かいましたが、夜ということもあり心配していた暑さは気になりませんでした。車窓からのビエンチャン市内は、一昔前の沖縄の風景を見ているようで、どこか懐かしく思ったのは私だけではなかったと思います。30 分ほどでホテルに到着、ホテルの回りは静かで南国ムードの広い部屋で一週間くつろげました。

5 月４日（月）朝は雀のさえずりで目が覚めました。本日は、ラオス JICA 事務所を訪問しプロジェクトの予定を説明しました。その後、セタティラート病院病院長ソンオク先生を表敬訪問し今後の予定を相談しました。続いて国立医科大学の歯学部を訪れ、歯学部の先生方とお話をしました。その中で、将来歯学部の学生のブラッシング指導への参加の可能性にも話題が及びました。午後からは、明日検診予定のドンコイ小学校を訪れ、翌日の段取り等を打ち合わせしました。

5 月５日（火）いよいよ歯科検診の始まりです。まず最初に歯ブラシ、歯磨剤、

洗口用フッ化物（ミラノール）の贈呈式を行いました。その後、全児童を集めて、むし歯の成り立ち、う蝕予防のレクチャーです。パソコンとプロジェクターを使って説明するのですが、予定していた広い教室が使えなくなり、小さい教室で２学年ごとに行ったため、予定よりも時間がかかってしまいました。肝心の検診においても、日本の学校検診と同じ要領で行うのですが、児童とカルテの不一致等が心配された。（児童の名簿自体が存在しないため）対策としてセタティラート病院の若い歯科医師が児童一人ひとりの名前を確認しながら検診したり、お互いに片言の英語で会話したりと時間がかかってしまいました。屋外での検診で、木陰ではあったがさすがに暑くてペットボトルの水を飲みながらの検診でした。暑さのせいもあって、全児童（２２７人）が終わったのは、昼食をはさんで午後にずれ込んでしまいました。検診後は、染色液で染め出してブラッシング指導を行いましたが、ここでも若い先生方が活躍しました。子供たちはとても素直で、検診が終わると合掌してお礼をしてくれました。その姿に胸を打たれ、暑さも吹っ飛んでしまいました。ホテルに戻って、データ集計と反省会を行い明日の検診の段取りを相談しました。

５月６日（水）この日は検診の前に、セタティラート病院において歯ブラシ及び治療用歯科材料の贈呈式がありました。マスコミ（ビエンチャンタイムス）の取材もあって厳かな贈呈式になりました。（翌日のビエンチャンタイムスに写真付で掲載された）二日目の検診は、今年から始めるポンパパオ小学校です。最初に、歯ブラシ、歯磨剤、洗口用フッ化物（ミラノール）の贈呈式を行い、パソコンとプロジェクターを使ってレクチャーを行おうとしたら、この地区が停電でありパソコンが使えない状況になりました。次回からは紙芝居のような媒体を用意しておこうと思いました。さて検診ですが、昨日の反省をふまえて担任の先生と協力しながら、児童（１５４人）を名簿どおりに順序よく検診しました。非常に流れがよくなり、検診後のブラッシング指導、チェック等もスムーズにできました。午前中で終わることができたので、小学校の先生方の招待を受けて一緒に昼食をいただきました。ラオスのチャーハンと米でできたそばに香草をいれて食べましたが、とても美味しかったです。その後、ホテルに帰って、データ集計と反省会を行いました。

５月７日（木）この日の検診は、ノンハイ小学校です。前日に校長先生と検診の打ち合わせを行っていたので、本日の検診（１５４人）もスムーズに行うことができました。３日間ペアを組んでラオスの若い歯科医師と一緒に検診を行ってきましたが、お互いの意思の疎通ができたところで、この日は後半をラオスの先生方に検診してもらいました。我々がそばについて一緒に検診しましたが、彼らを育てることも今回のミッションの中で意義のあることだと思います。検診、予防歯科に卓越した若い歯科医師が増えることはとてもいいことであり、将来沖縄に来て研修する予定もあるということで、我々もサポートしていきたいと思いました。

５月８日（金）前日検診したノンハイ小学校でむし歯のない児童の表彰を行い、その後セタティラート病院に移動して歯科スタッフとの最終ミーティングを行いました。今後の検診やフッ化物塗布等について話し合い今回のミッションを終えました。午後からは、ビエンチャン市内の凱旋門（パトゥサイ）、ラオスのシンボルでもあるタートルアン、郊外まで足を伸ばしラオスとタイの国境を流

れるメコン川にかかる友好橋（フレンドシップ・ブリッジ)、ブッダパーク等を訪れラオス観光を楽しみました。

3 日間の歯科検診を終えての感想ですが、う蝕罹患率は確かに高く口腔衛生教育もまだまだこれからというところではありますが、カリエスフリーの児童が意外と多い（15 人）という印象でした。来年は、歯科治療を受ける児童が増えて治療率も上がり DMF 指数もよくなってくることだと思います。今後この事業を成功させるためには改善しなければならない課題もありますが、ラオスの子供たちの口腔内環境を改善し口腔衛生教育を啓発していくための一助になると思います。

最後に、今回のプロジェクトに参加できたことは、私の歯科医師人生において忘れることのできない貴重な経験となりました。日本の学校とは比べ物にならない過酷な環境の教室の中で勉強し、校庭で走り回る無邪気な子供たち。合掌しながら挨拶する澄んだ瞳を見ていると、子供たちと心の交流ができたと感じられ、「ラオスに行って本当によかった」と思いました。１週間という短い時間ではありましたが、とても充実した時を過ごせました。小さな「国際貢献」ではありましたが、機会があればまたラオスに行ってみたいと思っております。

3.「ラオス国児童に対する歯磨き指導による口腔衛生改善事業」に参加して

藤井　亜矢子

今回、平成 21 年 2 月 15 日～2 月 21 日まで、本プロジェクトに参加する機会を頂きました。ラオスという国の印象は、正直、この医局に入局し、口唇口蓋裂患者支援センターによる無償手術ミッションや本プロジェクトの活動を知るまで、ほとんど持っていませんでした。それほど遠い存在であったラオスに初めて訪問した私の第一印象は、「なんだか懐かしい！」という感じでした。ラオスの首都ビエンチャンへの到着は夜 10 時頃だったのですが、夜遅い時間にも関わらず、空港へ降り立った瞬間に蒸し暑い空気が体を取り囲み、それは県外での長い一人暮らしの生活中、夏休みで久々に沖縄へ帰省した時の感覚とそっくりだったのです。沖縄とラオスが似ていると感じたのは気候だけではありませんでした。夜遅くの到着にも関わらず空港で出迎えて下さった通訳をはじめセタティラート病院の関係者の方々、その後プロジェクトで関わった方々の気さくでおおらかな人柄にもまた、沖縄との共通点を感じました。

今回のプロジェクトでは、対象校であるドンコイ小学校での歯科検診と、ドンコイ、ポンパパオ、ノンハイの３校での本プロジェクトの説明および口腔衛生に関する講義が行われました。それぞれの学校によって生徒や先生方の雰囲気に多少の違いはありましたが、何よりも、まっすぐで純粋な子供達の笑顔が印象的でした。

プロジェクトを進めていくにつれて、いくつもの問題点が見えてきましたが、中でもラオスの人々の、う触も含めた口腔内環境に対する問題意識の低さというものが、壁のように立ちはだかっているように思えました。小学校で「むし歯で歯が痛くなって困ったことがある人？」と問いかけると、ほとんどの生徒

が手を挙げます。しかし、痛いむし歯を治したい、治さなければいけないと思っている人はあまりいないようでした。その原因の一つとしては、むし歯で困らないためにはどうすればいいのか、そもそもむし歯はどのようにしてできるのか、といった教育を受ける機会に乏しいことがあると思います。またもう一つの原因として、ラオスの人には「子供の内はむし歯があっても、大人になれば丈夫な永久歯が生えるから大丈夫」という認識があるようです。これに関しては、一般の大人達だけでなく、セタティラート病院の歯科ドクターにも少なからず似たような認識を持っている方がいたことに衝撃を受けました。改めて、現在の問題点や改善すべき点の提示と改善方法の検討、実際の活動という一連のプロセスに関して、協力施設であるセタティラート病院歯科スタッフと我々スタッフとの密な意思疎通と意見交換が必要であると感じました。
実際に、最終日に行われた現地スタッフとのミーティングにおいては、我々琉大スタッフの本プロジェクトに対する熱意を伝え、現地スタッフの考えを聞き、内容の濃い意見交換ができたように思いました。
対象校には３校とも、学校の敷地内に小さな屋台のような売店があり、お菓子やジュースなどを売っています。生徒達は、むし歯の成因やむし歯が原因となって起こった炎症などを説明したスライドに、神妙な表情で、時々衝撃的な写真に顔をしかめながら見入った後、講義が終わると一目散に売店へ駆けて行き、お菓子を頬張っていました。ドンコイ小学校では、本プロジェクト開始後より全校生徒で行うことが日課となった歯磨きを、校庭に集まり一生懸命行った後、その足で売店へ駆けて行く生徒も少なくありませんでした。
私達の持つ常識だけでは語れない異なった常識や習慣を持つ人々に、新しい知識を伝え、新しい習慣を取り入れてもらうことの難しさを痛感した今回のプロジェクトへの参加でしたが、同時に、小学生のう触を予防することを第一歩とした、ラオスの人々の口腔環境改善、口腔内の健康につながる大きなプロジェクトに参加できたことは、非常に貴重な経験となりました。

Ministry of Health Lao-PDR
Setthathirath Hospital of Dental Division

Phanthavong Somphone DDS., Ph.D

Report

12- 20 June 2010
University of the Ryukyus School of Medicine
(Department of Oral and Maxillofacial Surgery)

First I would like to thanks and gratefully with you strongly to arrange for our representative to visit Japan, especially in Okinawa Ryukyus University for a participated an intensive practical Elementary School. The courses are very professional and make me increasing managerial and office productivity, and bringing me up-date with the latest technology and technique

The course is power-packed with a distinguished panel of professional practice for our country, it giving expert advice on many useful topics. The course is very detailed programmed is enclosed giving full information.

Finally I would like to thank every body who supported and encougerated me during
One week at Okinawa and gave me all their love from such a short distance of time absent from home

I would like to express my sincere gratitude to Professor Hajime Sunakawa Professor & Chief Department of Oral & Maxillofacial Functional Rehabilitation, who gave me the opportunity , guidance, and facilities to undertake participate an intensive practical.

Once more, I am greatly indebted to Dr Nakasone, who is partner to cooperated this workshop numerous times in a short period of time

I am also obliged to the Japanese (JICA) for funding me with the scholarship during the one week I have lived in Japan